

寺田縄の石仏探訪シリーズ（1）吉祥院

寺田縄地区内の寺社や路傍にまつられている石造物（以下石仏と呼称）は50基あります。その主なものを今後シリーズで紹介いたします。なお平塚市内には石仏が3千余基以上あり、それらを平成26年10月4日（日）～11月30日（日）の長期間、平塚市博物館で「平塚の石仏～3058の祈りと願い～」と題して特別展が開催されますので、この機会にご覧ください。



■ 初回は吉祥院本堂前に祀られている次の2基を紹介します。

（1）釈迦如来（しゃかにょらい）

仏教を説き広めた仏さまです。紀元前460年ごろ中インドのカピラ城主の子として誕生されました。29歳の時に出家、35歳で悟を開かれて仏とられました。石仏の釈迦如来は奈良時代より見られますが数量的には少なく、市内ではこの像を含めて5基あるのみです。

この石仏に彫られている銘文は像容の左右に「願以此功德 普及於一切」の偈頌（祈りの言葉）、

願主「満海」の文字が見られます。

この偈頌は法華経の経文にある言葉で「願わくばこの功德をもって、あまねく一切におよぼす」と読み、その意味は“唱えた経文の功德が、すべてに行き渡りますように”と願主「満海」和尚は釈迦如来の教えによってみんなが救われることを祈念され建立されたものと思われます。紀年銘はありませんが次の（2）の庚申塔の願主と同じ「満海」名より寛文年間（1661～1673）頃と推定されます。



(2) 庚申塔 (こうしんとう)

石仏の代表格は地蔵、道祖神、庚申塔です。

これらの石仏に彫られた像容や銘文はさまざまです。多くの庚申塔に彫りものは、上から順に日月、主尊像（ここでは24文字の光明真言を梵字で彫り、その意味は大日如来に智慧と慈悲でお救い下さいの願文で珍しいものです。よくみかけるのは青面金剛、猿田彦、大日如来、帝釈天、地蔵、阿弥陀如来等々）、その下に三猿（並びは写真のように中央に雌の不聞猿：左右に雄の不見猿・不言猿の配置が多い）と両脇に二羽の鶏が代表的な構図となっています。

この庚申塔に彫られた内容は二世安楽（現世と来世の幸せ）を願って、寛文3年（1663）10月に寺田縄村の寄進者達が満海和尚の勧めにより庚申塔を建立したとの内容が彫られています。

庚申信仰とは中国の道教の教えから来た信仰で、60日ごとに回ってくる庚申の日（かのえさるのひ）に、体内に住みついた三尸の虫が真夜中に体内より脱け出して天帝（てんのみかど）に当人の悪事を告げ、天帝が悪事の軽重に応じて、その人の寿命を決めると信じていました。そこで三尸の虫が脱け出さないよう朝方鶏が鳴くまで語り明かす。この行事を3年間・18回続けると三尸の虫が死に絶えるという言い伝えで庚申塔が建立されました。塔を建立した仲間たちは浄土に往生できると教えられていました。また塔を見たものは三悪道（地獄・餓鬼・畜生）を免れるともいわれ、江戸時代以降日本全国に多くの庚申塔が造立されました。寺田縄には4基の庚申塔があり、市内には180基もあります。